

## 小学生の生活能力と家庭科の内容に関する考察

小林 久 美

九州女子大学人間科学部人間発達学科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1（〒807-8586）

（2009年5月26日受付、2009年7月8日受理）

### 要 旨

本研究は、児童の自立のために必要な家庭科の役割を考え、教育内容の検討を試みようとしている。そこで第一段階として、子どもの生活能力習得率や保護者が学校教育へ求めていることを把握し、今後の家庭科の教育内容や構成を考える上で、役立てたい。

学校教育で学ぶ生活能力について家庭科に関わる内容を抽出し、小学生の保護者を対象に2008年7月から9月にかけて質問紙調査を行った。実施後回収した調査票100票のうち、有効回答票は96票であった。

結果は以下のとおりである。

- （1）児童の生活能力習得について、発達段階による学年差がもっとも多く認められた。しかし、「野菜を正しくゆでることができる」「みそ汁を作ることができる」「ミシンで縫うことができる」「環境を考えてものを購入できる」は、高学年でも習得率20%以下であったため、それらの項目を家庭科の中でも強化していく必要がある。
- （2）保護者が学校で教育することに要望の高かった項目は、食生活の栄養に関する知識であった。一方で、食生活の調理技能に関しては、あまり望んでいなかった。
- （3）調理技能や縫製技能への要望が低いなか、「ぞうきんやほうきの使い方」については、58%以上の高い要望があった。今後は、住生活についての時間を必ず確保しつつ、授業内容については、家庭での実践を仕組む展開にすると効果が上がることが予想される。

### 1. 目的

子どもが成長し自立した生活者になるには、「身体的能力」「芸術・文化的能力」「言語的能力」「社会的能力」「労働能力」「道徳性」「基本的生活習慣」「認識的能力」の8つの能力を身に付ける必要がある<sup>1)</sup>。子どもは、これらの能力を家庭でのしつけや学校教育の中で教わることや、人との関わりを通して自ら学ぶことで成長している。

小学校の学校教育に目を向けると、児童が自立するための基礎・基本について、さまざまな活動や教科の指導を通して支援している。家庭科では、その学習対象を「家庭生活を中心とする人間の生活」としており、児童の生活自立に、とくに関連の深い教科の一つであるといえる。

小学校「家庭科」で育成を目指している能力は、家庭生活と密接に関係しており学校教育だけでは担えない能力である。しかし、少子化や核家族化、都市化などの進展により、子どもの生活環境や学習環境も様変わりし、自然体験や技能体験の不足が指摘されている<sup>2)</sup>。現在、家庭だけで行うことも難しい。

本研究は、このような経験不足や生活環境の変化から、子どもの生活能力が低下してきているなかで、児童の自立のために必要な家庭科の役割を考え、教育内容の検討を試みようとしている。そこで第一段階として、児童の生活能力の取得率や保護者が学校教育へ求めていることを把握し、今後の家庭科の教育内容や構成を考える上で、役立てたい。

## 2. 調査方法

学校教育で学ぶ生活能力について家庭科に関わる内容を抽出し、小学生の保護者を対象に質問紙調査を行った。本研究では、発達段階による生活能力習得率の変化も調査範囲としているため、児童の学年は限定しなかった。

### (1) 日時及び対象

質問紙調査は、2008年7月から9月にかけて行った。対象は、福岡県および山口県に在住する小学生を持つ保護者とした結果、調査協力が得られたのは100名であった。実施後回収した調査票100票のうち、有効回答票は96票であった。

### (2) 調査内容

表1 調査項目について

1979年	家庭	細目 (項目)
骨を強くするための食事・偏食の是正	身体的能力	B バランスよく食べる
太りすぎやせすぎの予防		B 食品の栄養的な特徴を知っている
きちんとした姿勢の保持		B 偏食をなくす
体育の授業以外の運動への参加	社会的能力	A 家族に協力する
年上、年下の人とのつき合い方・異性とのつき合い方		A 家族とのふれあいや団らんをする
誕生会の持ち方・けんかや仲なごりの仕方		C 洗濯をする
ゲーム (トランプ、将棋など) の仕方	労働能力	C 針と糸を使って縫う
		C ミシンで縫う
		B ご飯が炊ける
のこぎり、小刀、かなづちなどの道具の使い方	基礎的生活習慣	B みそ汁が作れる
かま、スコップ、くわなどの使い方		B 包丁を使って食品 (リンゴなど) の皮がむける
家事の手伝いのしつけ		B 包丁で食品を切れる
ぞうきんやほうぎの使い方		B 野菜や卵をゆでる
手順よく計画的に仕事をする		B 正しい配膳ができる
		C ぞうきんやほうぎを使える
		C 日常着を衛生的にTPOに合わせて着る
テレビ (ラジオ) を見る時間の厳守		C 身の回りの整理せいとん
身の回りの整理せいとん		D ゴミの分別ができる
小遣いの金額と使い方		D 必要な物を正しく選び購入できる
自分のものと他人の物との区別		D 不要品の再利用を考える
ものを大事にするしつけ便所の使い方や大小便の習慣		D 環境を考えて購入できる

\*家庭のアルファベットは学習指導要領の内容を示す。

調査内容は、児童の生活能力の習熟度やそれらをどこで担うかについてであり、習熟度に関する21項目とどこで教えるかに関する21項目を設定した。前述した8つの能力のうち、とくに小学校「家庭科」に関わる能力と考えられる「身体的能力」「社会的能力」「労働能力」「基本的生活習慣」を取り上げ、それぞれ細目を設定した（表1）。細目の設定にあたっては、1979年「だれが教育を担うべきか」の調査項目<sup>1)</sup>を平成20年告示の小学校学習指導要領の家庭科の内容に照らし取り出した。項目数は、「身体的能力」については3項目、「社会的能力」2項目、「労働能力」10項目、「基本的生活習慣」6項目の計21項目である。

### 3. 結果および考察

#### (1) 回答者および児童の学年・性別

回答者96名は、ほとんどが児童の母親で、父親が答えたのは4名であった。また年齢は、28歳から49歳で、年代別に見ると20歳代7名、30歳代55名、40歳代34名であった。就業率は、75.0%（72名）で、そのうち57名が週に5日以上就業していた。

児童の学年および性別は表2の通りである。

表2 児童の学年及び性別

学年	性別		男児		女児		計	
			人数	%	人数	%	人数	%
1			7	16.7	8	14.8	15	15.6
2			5	11.9	15	27.8	20	20.8
3			13	30.9	5	9.3	18	18.8
4			7	16.7	10	18.5	17	17.7
5			5	11.9	7	12.9	12	12.5
6			5	11.9	9	16.7	14	14.6
計			42	100.0	54	100.0	96	100.0

#### (2) 児童の生活能力習得

家庭科に関わる能力について、児童の発達段階や性別による習得の違いをみるために、22項目を学年別および性別に分析した。さらに、日常生活での生活体験、生活時間による違いについても、手伝いの有無や一週間の稽古日数により分析した。

##### 1) 学年別

学年を2学年ずつに分け、第1学年と第2学年を低学年、第3学年と第4学年を中学年、第5学年と第6学年を高学年とし、学習指導要領の内容毎に「できる」の割合を示した（図1）。当然であるが、ほとんどの項目で高学年の生活技能習得したものの割合が下学年よりも高く、年齢を重ねる毎に生活能力が身に付いていることが分かる。しかし生活能力を習得したものが50%を超える項目は少なく、A家庭生活と家族の「家族団らんを楽しむことができる」「家族に協力する」、B日常の食事と調理の「包丁で食品を切ることができる」、

C 快適な衣服と住まいの「ぞうきんやほうきを使い掃除をすることができる」「日常着を正しく選んで着ることができる」、D 身近な消費と環境の「ゴミを分別して捨てることができる」の6項目であった。

高学年と他の学年の差で、もっとも大きかったのは「針と糸を使って縫うことができる」39.5ポイントで、次に「ご飯を炊くことができる」29.9ポイント「包丁で食品の皮をむくことができる」25.1ポイントであり、特に高学年が他学年に比べ習得していることが分かる。他にも「ミシンで縫うことができる」「みそ汁を作ることができる」の2項目には差が認められた。

一方、高学年の習得したものの割合が低い項目もあった。「バランスよく食べることができる」は中学年がもっとも高く、「団らんを楽しむことができる」は低学年がもっとも高かった。

内容Bの「野菜を正しくゆでることができる」「みそ汁を作ることができる」内容Cの「ミシンで縫うことができる」、内容Dの「環境を考えてものを購入できる」の4項目については、低学年・中学年にできるものはおらず、高学年でも20%未満であった。

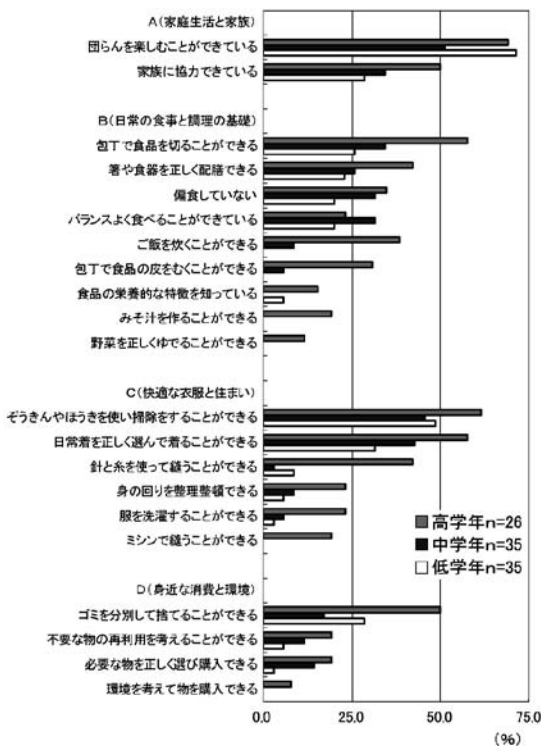


図1 学年別生活能力習得

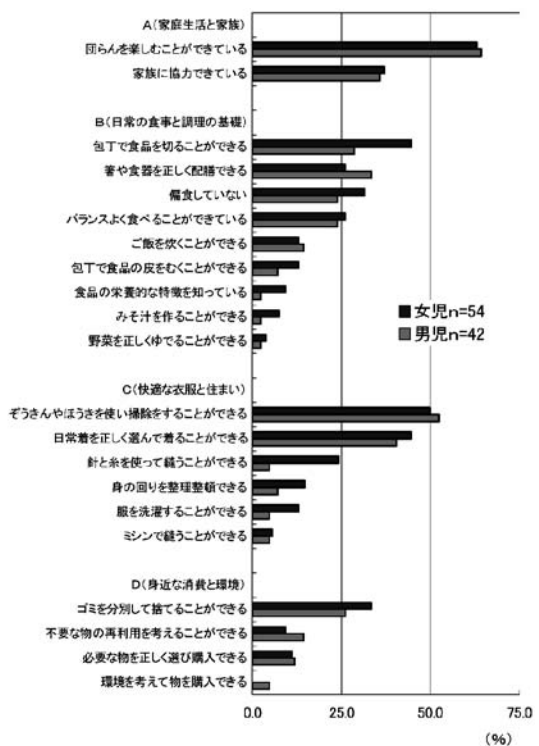


図2 男女別生活技能習得

## 2) 性別

性別においても学年別と同様に「できる」の割合を示した(図2)。

性別で大きな差がみられたのは、「針と糸を使って縫うことができる」に19.3ポイント、「包丁で食品を切ることができる」に15.9ポイントであり、どちらも女兒が男児に比べて習得割合が高いことが分かった。

## 3) 手伝いとの関係

保護者の回答から、手伝いをしている児童は81名(84.4%)であったが、決められた手伝いがあるかを問うと、42名(43.8%)となり半数を割った。どのような手伝いをしているのかについては、1990年の手伝い<sup>3)</sup>と比較したものを表に示す(表3)。表の数値は、学年全体を母数とした手伝いの割合である。18年前と手伝いの種類はほとんど変わらないが、今回の調査では、食事前後の行為である配膳や食器運びが上位に入っていた。全体に占めるパーセンテージは、複数回答であるにもかかわらず、18年前のものよりやや低かった(表4)。比率を比較しても、18年前の児童の方がどの学年においても決められた手伝いを行っていたことが分かる。1990年の調査で2位であった「ゴミ捨て」は、今回の調査の上位には入らなかった。「ゴミ捨て」を決められた手伝いにしているのは、3年生の児童1名のみであった。

決められた手伝いをしている児童の方がそうでない児童より生活能力習得率が高くなることを予想していたが、決められた手伝いの有無が生活能力に与える影響は、あまりなく、もっとも差が見られたのは、「ご飯を炊くことができる」が決められた手伝いがある児童23.8%に対して決められた手伝いがない児童5.6%となり、18.3ポイントの差があった。

表3 手伝いの比較

1990年			2008年			計			(%)		
									低学	中学	高学
1位	風呂掃除	15	1位	風呂掃除	12.5	(6.3	5.2	1.0)			
2位	ゴミ捨て	11	2位	配膳	9.4	(3.1	2.1	4.2)			
3位	食器洗い	8	3位	食器運び	7.3	(3.1	2.1	2.1)			
4位	新聞取り	8	4位	ペットの世話	6.3	(1.1	5.2	0.0)			
5位	布団敷き	3	5位	新聞・郵便物取り	5.2	(2.1	2.1	1.0)			
6位	生き物の世話	3	6位	靴並べ	3.1	(2.1	0.0	1.0)			
7位	食事の後かたづけ	3		洗濯物をたたむ	3.1	(0.0	1.0	2.1)			

表4 決められた手伝いをしている児童の割合比較 (%)

	1990年	2008年
低学年	70.8	40.0
中学年	74.1	50.0
高学年	92.4	42.3

表5 一週間の稽古回数 (％)

	していない 2日以下	3日以上	計
低学年	68.6	31.4	100.0
中学年	77.1	22.9	100.0
高学年	64.0	36.0	100.0

#### 4) 稽古の回数との関係

稽古をしている児童は、82名（85.1％）で、多くの児童が稽古に生活時間を費やしている。学年による回数をみると、稽古をしていない児童および一週間に2日以内で稽古をしている児童の割合は、中学年が低学年や高学年より多かった（表5）。また、先述した決められた手伝いの有無でも「有る」という児童は、中学年が低学年や高学年より多かったことから、稽古の回数が少ないと手伝いをしているものが多くなるといえるのかもしれない。

しかし、稽古の回数による生活技能習得率については、どの項目でも有意差は認められず、稽古の回数によって習得率が変わることはなかった。

なお、母親の年齢および就業時間で大きな差はみられなかった。

以上のことから、生活技能習得については、発達段階による学年差がもっとも多く認められ、年齢が高い方が技能も身に付いているという結果となった。特に有意差の認められた項目は、「針と糸を使って縫うことができる」「ご飯を炊くことができる」「包丁で食品の皮をむくことができる」「ミシンで縫うことができる」「みそ汁を作ることができる」であったが、手伝いの種類を見ると、それらに関連した手伝いを家庭で多く行っているとはいえない。少なからず、家庭科で学んだことが影響を与えている可能性もある。

### （3）どこで教えるか

#### 1) 生活技能別

生活技能をどこで教えるかについて、保護者が求める学校および家庭の割合を聞いたものを各能力別に示した（図3）。「労働能力」の項目は、家庭科学習指導要領の内容Bと内容Cに分け、「労働能力（B）」と「労働能力（C）」として表示した。

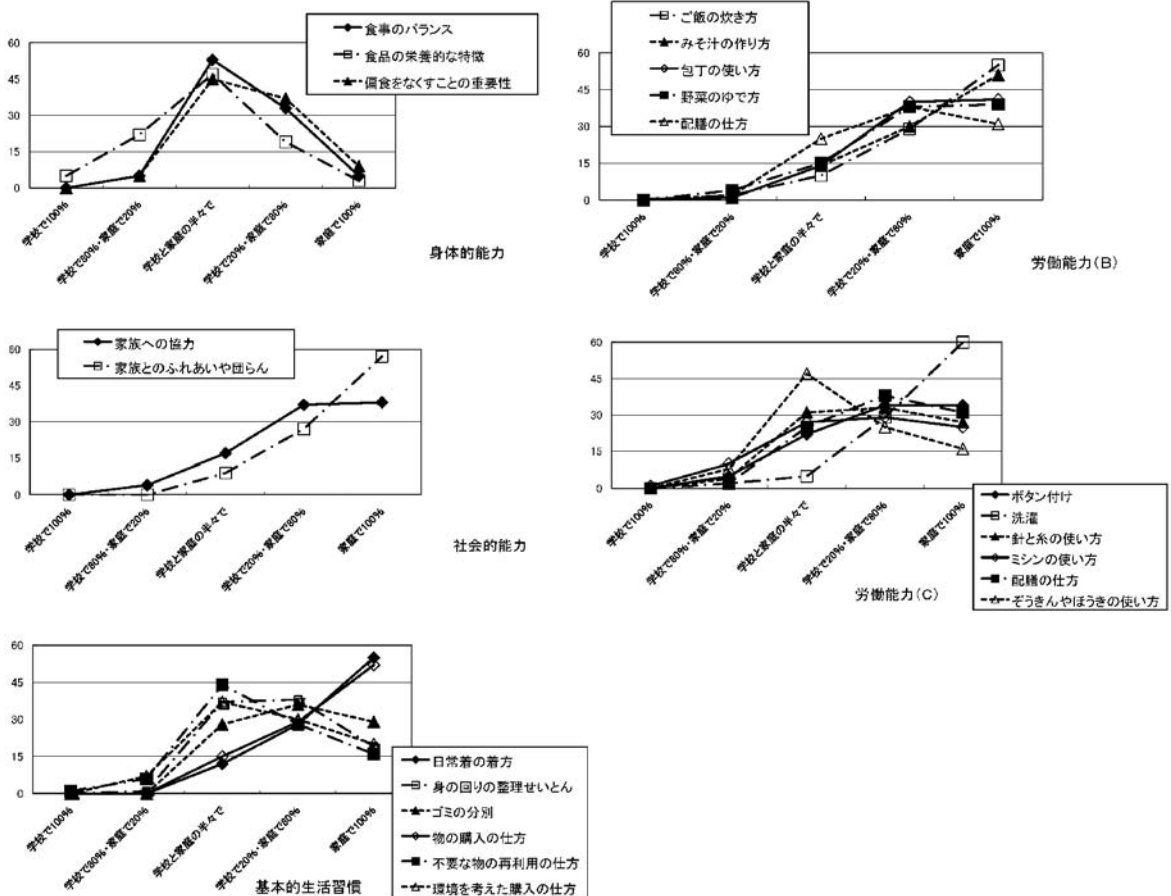


図3 保護者が求める学校および家庭の割合

「身体的能力」については、3項目とも家庭科の学習指導要領のBの内容であり、すべて中心が山形になっており、保護者が学校と家庭がともに教育を担うべきであると考えていることが分かる。細かくみていくと「食品の栄養的な特徴」はやや左寄りの山形を示し、学校での教育を望む傾向があり、反対に「偏食をなくすことの重要性」や「食事のバランス」は右寄りの山形を示し、やや家庭の方が教えなければならないと考えているようである。

「社会的能力」と「労働能力(B)」については、右肩上がりになっており、家庭で教育を担うべきだと考えているものが多い。

「基本的生活習慣」では、やや家庭が教育を担うべきであると考えている右寄りの山形と右肩上がりの項目が混在していた。



「労働能力（C）」は、右肩上がりが多いが、「洗濯」はその傾斜が大きく、家庭で担うべきだと考えているものが多い。その中で、「ぞうきんやほうきの使い方」は、右寄りの山形であり、学校教育の中でも行ってほしいと考えているようである。

## 2) 学校教育における育成を期待される生活能力

保護者が生活技能について学校教育でも半分以上（50％から100％）は教育して欲しいと考えている項目から、保護者が学校教育へ求めているものを探った。表6は、学校教育でも半分以上は教育して欲しいと考えている項目を割合が高い順に表に示したものである。

「食品の栄養的な特徴」と「食事のバランス」が上位にあり、学習指導要領の内容B（日常の食事と調理の基礎）の教育を望んでいることが分かる。一方で同じ内容Bの「ご飯の炊き方」「包丁の使い方」「みそ汁の作り方」のような調理技能については、下位に位置していた。内容C（快適な衣服と住まい）をみると「ぞうきんやほうきの使い方」や「ミシンの使い方」が比較的上位に位置し、「洗濯」や「日常着の着方」など日常的に行っている生活技能は下位にあった。内容D（身近な消費と環境）は、「不要な物の再利用の仕方」や「環境を考えた購入の仕方」のような環境に配慮した項目が上位にみられた。内容A（家庭生活と家族）は比較的下位に位置し、学校教育よりも家庭で教育すると考えられていた。

表6 学校でも半分以上を教育

内容	項目	%
B	食品の栄養的な特徴	77.5
B	食事のバランス	60.8
C	ぞうきんやほうきの使い方	58.1
D	不要な物の再利用の仕方	53.3
B	偏食をなくすことの重要性	52.6
D	環境を考えた購入の仕方	46.6
C	ミシンの使い方	40.2
C	身の回りの整理せいとん	39.4
C	針と糸の使い方	37.2
D	ゴミの分別	29.1
B	配膳の仕方	28.7
C	ボタン付け	27.9
A	家族への協力	22.6
B	野菜のゆで方	21.0
B	みそ汁の作り方	16.3
B	包丁の使い方	16.0
D	物の購入の仕方	15.5
B	ご飯の炊き方	13.2
C	日常着の着方	12.2
A	家族とのふれあいや団らん	9.4
C	洗濯	7.5



## 3) 家庭で教育している生活能力

家庭で担うべきだと考えている項目は、家庭で教えられている項目であると考えられる。今回の調査で、7割以上の保護者が「家庭でほとんどもを担うべき（家庭で100%、80%）」と回答した項目は10項目あった。それら10項目について高学年の習得率を示した（表7）。

「家族の触れ合いやだんらん」と「日常着の着方」以外の項目の習得率は、どれも半分以下であった。なかでも、「野菜のゆで方」と「みそ汁の作り方」の調理技能に関する能力は10%台の習得率となっていた。家庭で教育を行っていても習得できていないならば、家庭科の中でどのように補充していくかが課題となる。冷凍ゆで野菜やインスタントみそ汁が豊富に市販されているなか、匂や栄養価やおいしさの面から生の野菜から作ることや手づくりの意義を家庭科の中で教えていかなければならないであろう。

表7 家庭でも教育を (％)

項目	家庭で80%・ 100%担うべき	高学年の習得率
洗濯	88.5	23.1
家族とのふれあいや団らん	84.4	69.2
ご飯の炊き方	84.4	38.5
日常着の着方	82.3	57.7
みそ汁の作り方	81.3	19.2
包丁の使い方（剥く・切る）	81.3	44.2
物の購入の仕方	80.2	19.2
野菜のゆで方	77.1	11.5
家族への協力	74.0	42.3

## 4) 教える必要なし

生活能力の「身体的能力」については、すべての保護者が学校や家庭もしくはその両方で教えるべきであると考えていたが、項目によっては、家庭でも学校でも教える必要がないとの回答もあった。

「社会的能力」では、「家族とのふれあいや団らん」の項目に3人が教える必要がないとした。「労働能力」では、「ボタン付け」、「針と糸の使い方」が各1人、「ミシンの使い方」が4人、「基本的生活習慣」では「日常着の着方」と「環境を考えた購入の仕方」の項目に1人ずつみられた。

「必要ない」ということは、もちろん家庭でも教えないことになる。先述したお手伝い

の種類をみても食生活については、食器を運ぶことや配膳などを行っている児童は各7%で、衣服の手入れについては「洗濯物をたたむ」が3%ほどであった。このような手伝いの状況で、家庭の仕事が、学校でさえも教えられなければ自然に身に付くはずはない。「針と糸の使い方」や「ミシンの使い方」などは、毎日着用している衣服の原理を理解させることに必要であり、そのことが被服選択などの「日常の着方」に繋がっていく重要な内容である。必要ないと感じている保護者が少しでもいたこれらの項目は、今後、学校教育で一層徹底して行っていかなければならない。

#### 4. まとめ

##### (1) 児童の生活能力習得について

- 1) ほとんどの項目で高学年の生活技能習得したものの割合が下学年よりも高い。
- 2) 大きな差が見られた項目は、「針と糸を使って縫うことができる」「ご飯を炊くことができる」「包丁で食品の皮をむくことができる」「ミシンで縫うことができる」「みそ汁を作ることができる」の5項目で、高学年が他学年に比べ習得できていた。
- 3) 「野菜を正しくゆでることができる」「みそ汁を作ることができる」「ミシンで縫うことができる」「環境を考えてものを購入できる」の4項目については、低学年・中学年でできるものはおらず、高学年でも20%未満であった。
- 4) 性別では、「針と糸を使って縫うことができる」について、女兒が男児に比べて習得している割合が高かった。
- 5) 決められた手伝いの有無では、「ご飯を炊くことができる」について、決められた手伝いがある児童の方が習得している割合が高かった。

生活能力習得については、発達段階による学年差がもっとも多く認められ、年齢が高い方が技能も身に付いているという結果となった。低学年・中学年では「できる」がいなかった項目も4項目あった。学年による有意差の認められた項目が5項目あったが、手伝いの種類を見ると、それらに関連した手伝いを家庭で多く行っているとはいえない状況であった。少なからず、家庭科で学んだことが影響を与えているのかもしれない。しかし、高学年でも習得率が少ない項目も多くあったため、それらの項目を家庭科の中でも強化していく必要があると考えられる。

また、5年生からの家庭科が始まる以前の早い段階で学校教育でも取り入れた方がよいものとしては、決められた手伝いの中で低学年にも多かった「風呂掃除」「食器運び」で、家庭科の内容でみれば、住生活の中の掃除に関することや、食器運びに関わる配膳やマナーに関することなどである。家庭で実践されていることが少しでも高いものについて、学校教育の中でも行い児童の関心を高めることが望ましいと考える。他にも早期に学校教育の中に取り入れた方がよい内容としては、決められた手伝いとして減少していた「ゴミ捨て（出し）」

に関わる内容である。ゴミの分別収集が進む中、以前よりゴミを出すことが複雑になったことが「決められた手伝い」が減少する原因かもしれないが、ゴミを捨てる行為は毎日行われていて、その後の環境教育への基礎となることが可能なため早期に行う方がよいと考える。

## (2) どこで教えるか

- 1) 学校教育でも半分以上は教育して欲しいと考えている項目の割合が高かったものは、「食品の栄養的な特徴」と「食事のバランス」で、学習指導要領の内容B（日常の食事と調理の基礎）であった。
- 2) 内容C（快適な衣服と住まい）の「ぞうきんやほうきの使い方」「ミシンの使い方」、内容D（身近な消費と環境）の「不要な物の再利用の仕方」「環境を考えた購入の仕方」は、学校で教えて欲しいと考えている項目の比較的上位に位置していた。
- 3) 内容C（快適な衣服と住まい）の「洗濯」「日常着の着方」、内容A（家庭生活と家族）「家族との触れ合いや団らん」など日常的に行っている生活技能は学校で教えて欲しいと考えている項目の下位にあった。
- 4) 「家族とのふれあいや団らん」「ボタン付け」「針と糸の使い方」「ミシンの使い方」「日常着の着方」「環境を考えた購入の仕方」の6項目には、「教える必要なし」と回答した保護者もいた。

学校で教育することに要望の高かった「食品の栄養的な特徴」「食事のバランス」は、食生活の栄養に関する知識であり、近年の健康ブームや食育の広報の影響を受けているのかもしれない。一方で、食生活の調理技能に関しては、あまり望んでいないことが明らかになった。しかし、これらの技能の習得率は高いとはいえず、特に低学年・中学年では取得率が低かった。さらに18年前のように、高学年になるほどお手伝いの割合が高くなるという傾向も見られないことから、発達段階に合わせて家庭で教育しているとも思えない。保護者の要望の高かった栄養的な知識はもちろん技能に関しても、家庭科の中で実習や演習を多く取り入れ、一層充実させる必要がある。また、教える「必要なし」との回答があった7項目についても、原理原則を学ぶための重要な内容であることを保護者に向けてだけでなく、児童に十分理解させていく授業展開にする必要がある。

調理技能や縫製技能への要望が低いなか、「ぞうきんやほうきの使い方」については、58%以上の高い要望があった。しかし、技能習得率は比較的高く、児童は「ぞうきんやほうきを使って掃除をする」ことができるのである。手伝いについても「風呂掃除」がもっとも多くみられていた。これらのことから、住生活の掃除の技能に関してはできているし、やっているが、学校教育の中でも教育して欲しいという結果になった。今後は、住生活についての時間を必ず確保しつつ、授業内容については、家庭での実践を仕組む展開にすると効果が上がることが予想される。

**参考文献**

- 1) 矢野 峻 編 『だれが教育をになうべきか』、西日本新聞社、昭和54年2月20日
- 2) 古谷吉男 他 「児童期までの生活技能の習得に関する調査研究（その1）」、『長崎大学紀要』、48号、2008年、pp. 63-70
- 3) 丸岡玲子 『子どもの自立と生活力』、大月書店、1990年7月23日

## Consideration about the contents of Home Economics and the lifestyle ability of the elementary school child

Kumi KOBAYASHI

Department of Education and psychology, Faculty of Humanities,  
Kyushu Women's University  
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

### Abstract

This research will try to examine the education contents in thinking about the necessary role of Home Economics for the independence of a child. Therefore, the first step is to grasp what is the acquisition rate for lifestyle ability and what the parents expect of school education. I want to be useful in thinking about the future of Home Economics education contents and its constitution. I extracted contents concerning Home Economics and the lifestyle ability learned through school education, by conducting a survey from July to September of 2008 among the guardians of elementary school children. Among the 100 questionnaires which I collected, 96 of them were valid for the research. Results are as follows:

- (1) About the child's acquisition of the lifestyle ability, it was greatly recognized that the stages of development depended on the grade difference. However, due to the abilities to [correctly boil vegetables], [make soybean paste soup], [use a sewing machine], [make purchases thinking about the environment] even among the upper grades were equal to or less than 20% acquisition rate, it is necessary to reinforce those items in Home Economics.
- (2) The topic which was particularly high in demand from the guardians to be taught in schools was knowledge about the nourishment of the eating habits. On the other hand, there was not much demand about the cooking skill of the dietary habits.
- (3) While the demand for cooking skills and the sewing skills were low, there was a high demand of more than 58% for learning how to use the dust cloth and broom. That an effect stops when I do it in development to set up practice at the home is expected about the class contents in future while securing time about the house life by all means. Concerning the class contents, it is expected that better results can be achieved in the future when more time is allowed for household lifestyle education and the application of the skills in the home.